

あとがき

「東山梨教育研究」発刊50年となる、平成23年度は私たちにとって強烈に記憶に残る年度になりました。昨年3月11日、わが国は戦後最大の災害といわれる東日本大震災に見舞われました。現在も復興に向けて各方面で懸命な取組が進められています。

4月、小学校では「生きる力」の育成を基本理念にする新しい学習指導要領が全面実施となりました。東日本大震災を目の当たりにして、私たちは、改めて「生きる力」について考えさせられました。

「生きる力」。この言葉は平成8年の中教審答申で登場して以来、今まで教育改革のキーワードとして位置付けられてきました。「東山梨教育研究」でも、「生きる力」の育成という視点で、身近な生活の中から「問い」を見つけ、解決を求めさせるといった取組を進め、その手応えが徐々に確かなものになっている実践が紹介されています。しかしながら、東日本大震災という現実に向き合う中で、私たちは児童生徒に対し、ただ静かに波打っている海をイメージさせるだけの教育にとどまってはいけないのだと考えます。厳しい高波が襲ってくる中でも、見通しを誤らず、生き延びていく力。きれいごとの言葉で終わらない、こうした次元での「生きる力」を身に付けさせる教育を私たちはさらに意識して進めなければならないと考えます。東日本大震災後に掲載された記事「釜石の奇跡」には、大津波から避難する岩手県釜石市の鶴住居小学校（361人）、釜石東中学校（222人）の様子が紹介されています。その一節を紹介します。

・・・しかし、児童が3階に集まり始めたころ、隣接する釜石東中では生徒は校庭に駆け出していた。校内放送は停電のために使えなかったが、これを見た児童たちは日頃の同中との合同訓練を思い出して自らの判断で校庭に駆け出していた。児童・生徒ら約600人は、500メートル後方にある高台のグループホームまで避難。ここも指定避難場所だったが一息つく間もなく、裏側の崖が崩れるのを目撃する。危険を感じて児童生徒はさらに約500メートル先の高台にある介護福祉施設を目指した。その約30秒後、グループホームは津波にのまれた。・・・

子どもたちに「生きる力」とはどのようなものか聞かれた時に、「生きる力」の具体について語れる教職員でありたい。そして、「生きる力」の育成と様々な課題解決に向けて、教職員一人一人の資質向上はもとより、全教職員が一丸となり創意工夫を重ねて教育活動の充実を目指していきたいと思えます。終わりになりましたが、「東山梨教育研究第50号」の発刊にあたり、お忙しい折に玉稿を賜りました甲州市教育委員長様、並びに東山梨教育協議会長様をはじめ、貴重な原稿を寄せられた諸先生方、各市教育委員会の財政面でのご援助に対し心より感謝申し上げます。なお、本冊子の表紙は教育協議会「図工・美術部会」の古屋ゆか先生（東雲小学校1年 坂田愛生さん作）にお願いいたしました。ご協力ありがとうございました。

【編集委員】

山梨市教育委員会教育長	丸山 森人
甲州市教育委員会教育長	保坂 一仁
峡東教育事務所副所長	楡井 俊彦
峡東教育事務所指導主事	小林 俊彦
東山梨教育協議会事務局次長	那須 丈彦
東山梨教育協議会研究推進委員長	梶原 貴
山梨支会研究推進委員長	飯室 林
山梨支会研究推進副委員長	岩下 城
甲州支会研究推進委員長	佐久間 潤
甲州支会研究推進副委員長	山宮 武徳

発行日	平成24年4月2日
発行責任者	東山梨教育研究 編集実行委員会
編集責任者	東山梨教育研究 編集実行委員会事務局
印刷所	昭和堂印刷